

### 収穫、袋詰め、販売…秋田商高生が体験

# 地元農家に学び

## 経営センス磨く

秋田商業高校の生徒たちが、地元の農を訪れ農業体験について学習している。農作物の収穫、袋詰め、販売といった一連の流れに触れることで、農業ビジネスのつながりや起業家精神を学ぼうと、考えた。秋田独自のキャリア教育「A R I S H P O P アキショツプ」の環。



自分たちで収穫し、袋詰めた野菜を販売する秋田商高の生徒（左）＝先月10日、秋田市のいづく川尻店

「秋田藩とコラボした取 買った物に訪れた会員の三浦先月10日、秋田市のいづく川尻店、でその日のテロ、シを見て新鮮な印象を受けましたと話し、キャベツなど買い物客に呼び掛けて、そばに並ぶのは、取れたの野菜は秋田市四ツ小屋の農

場「SENTE」で販売する。生徒たちを指導する沢田石武雄さん（28）が育てたのだ。生徒たちはアキショツプの中で、沢田さんから「ビジネスとしての農業」を学んでいる。沢田石武雄さんは就農2年目。コマやキャベツ、エダマなど約30種の農作物を生産している。畑には種手の白土や秋田の間に伐材で作った木製棚など、農家の天候資源を活用。他の農家との差別化を図ろうと、産家の農場に「センテ」の



野菜の収穫に臨む秋田商高の生徒たち＝先月9日、秋田市四ツ小屋の農場「SENTE」（提供写真）

### キャリア教育、生産現場でも

屋号を付け、ロゴも作って野菜をブランド化している。センテには、秋田の農業に「先手」を打つという意味も込められている。

「一般的な生産者としての農業ではなく、消費者に自分の思いを届け、自らのブランドの価値を伝える」とを重視している。と沢田石武雄さん。

生徒たちは先月9日、秋田石武雄さんの農場で野菜の収穫体験。翌10日にはいづく川尻店での販売のための野菜を収穫し、袋詰めた。

1袋に詰める野菜の数や大きさのバランスを考える。袋の中で商品が動かないようにする。沢田石武雄さんが「一つ生徒にアドバイスする。キャベツの袋には「カッパのこうふ」と書かれたシールを貼った。生徒が考えたキャッ

「普設キユウを買わない人にも買ってもらうような、こういう工夫が大切」と沢田石武雄さん。作り手の顔が見える工夫の一つとして、生徒の似顔絵を描いたシールも作成。「消費者にとって安心感のある商品にする」とが重要だと伝えた。

アキショツプは昨年度まで商関係がメインで、生徒が農作物などの生産現場まで行くことはなかった。だが本年度は、アキショツプで食料として扱うことのできる野菜に着目。アキショツプに参加する2、3年生15人が生産現場に足を運びながら、野菜がどう売られるのかを学んでいる。

いづく川尻店で行った。3年の宗谷悠輝さん18は「商品の見せ方がいかに大事かが分かった。実際に店頭に立たせてもらったこともあった」と話す。

沢田石武雄さんは「農業は地域に即した産業だが、担い手が不足している。今回の取り組みをきっかけにシニア的な目標で農業を見てもらう。将来的に農業の新たな可能性が生まれることを期待したい」と語る。

秋田商業高は本年度もこの取り組みを続ける予定。（二木佳奈）